

## いい教科書をつくろう

齋藤 栄二（平安女学院大学教授）



「いい教科書をつくろう！」*NEW CROWN*の編集陣の願いは、その一言に尽きる。私個人としても、20年以上にわたって、その願いのために全力を尽くしてきた。そして、そのためにこそ30人以上よりなる編集陣一人ひとりが努力を積み重ねてきたのである。

それでは「いい教科書」とはどんな教科書なのだろうか。私は、それは何よりもまず「世界中には、人の心の豊かさ、悲しさ、つらさ、そして楽しさを、いきいきと表現していることばがある。そういう生きた人間の心のメッセージを生徒に伝える教科書」ということだと思う。そういうメッセージを、やさしくわかりやすい英語で若き世代に伝えることこそが、私たち教科書をつくる者とそれを使っていく英語教師の責任ではないだろうか。

私は、過日ある英語教育研究会に講師として呼んでいただいた。そこではまず日本人教師と外国人講師のチームティーチングの授業があった。授業の前に指導案を見せていただいて、私はドキリとした。興奮したのである。なぜなら指導案の最初の本時の目的のところに、次のように書かれていたからだ。

- (1) To have students know about Sudan.
- (2) To have students know about hunger and the circumstances of children in Africa.
- (3) To have students think about the issue of humanitarianism and journalism.

私は、本時の目的のところにこういう文が並べられているのを見たのはおそらく初めてである。なぜ興奮したのか。私はかつて雑誌に次のように書いたからである。

「同僚の教師諸君！いつの日にか、あなたが書く授業案のトップに＜Mother Teresaの生き方を彼女の語ったことばを通して知る＞とか＜King 牧師ほど、ことばの力を知っていた人はいません。それがどういうところに現れていたか考えてみよう＞といった目標を、＜関係代名詞 that の用法＞などに代えて書く日が来るのを実現しようじゃありませんか。」

そういった線に沿った授業案と、その指導の試みが現れはじめたのである。文法事項が大切でないとは言わない。しかしそれだけにとどまっていたのでは、英語教育にはならない。ことばの能力やコミュニケーションの本筋はメッセージを伝えることであるはずだからだ。伝えるべきメッセージの豊かな内容を、生徒に考えさせる授業を力を合わせて創っていくことを呼びかけたい。